大学におけるライティングセンターの役割

報告者
佐渡島紗織（早稲田大学　国際学術院　教授）
外山　敦子（愛知淑徳大学　初年次教育部門　准教授）
小林　至道（関西大学　教育推進部　特別任用助教）

コーディネーター
長谷川岳史（龍谷大学　学修支援・教育開発センター長／経営学部　教授）

参加人数
35名

学生の「書く力」を育成するために行われるライティング支援は、学生の基礎学力の低下や学力格差などを是正するためのリメディアルを提供する支援という枠を超え、初年次教育、キャリア教育など、大学教育全般にかかわる学生の成長に必要不可欠な支援として認識されつつある。近年、名称は様々であるが、学生の「書く力」を育成するライティングセンターを大学として設置する所が増えてきているのは、その表れであろう。

そこで、本分科会では、早稲田大学ライティング・センター、愛知淑徳大学ライティングサポートデスク、関西大学ライティングラボの３大学より、センター設置までのプロセスや、設置後の状況、支援内容などについて報告いただき、大学におけるライティングセンターの役割とは何か、「書く力」を育成する支援が大学教育にどのような影響を及ぼすのか、参加者とともに考えてみたい。

〈第 10 分科会〉

大学におけるライティングセンターの役割

1．第１０分科会の進行表

10:00-10:05	趣旨説明	長谷川岳史（龍谷大学　学修支援・教育開発センター長 / 経営学部教授）
10:05-10:45	事例報告	佐渡島紗織氏（早稲田大学　国際学術院　教授） テーマ：早稲田大学ライティング・センターにおける指導と運営
10:45-11:25	事例報告	外山敦子氏（愛知淑徳大学　初年次教育部門　准教授） テーマ：地方中堅・中規模校における「ライティング支援」の実践と課題
11:25-12:05	事例報告	小林至道氏（関西大学　教育推進部　特別任用助教） テーマ：関西大学ライティングラボの取り組みを通して大学教育のイマドキを考える
12:05-13:35	昼休み休憩	【参加者】質問・コメント票の記入と提出後、昼休み休憩 【コーディネーター】質問・コメント票の回収 【コーディネーター・報告者】質問・コメント票の整理
13:35-15:15	ディスカッション	【前半】質問・コメント票に対する報告者からの回答、補足説明 【後半】グループになっての情報交換・ディスカッション
15:15-15:25	総括コメント	各報告者からの総括コメント
15:25-15:30	閉会挨拶	長谷川岳史

2．第１０分科会の内容

第１０分科会は「大学におけるライティングセンターの役割」をテーマに、近年、学生の「書く力」を育成するために行われるライティング支援が、学生の基礎学力の低下や学力格差などを是正するためのリメディアルを提供する支援という枠を超え、初年次教育、キャリア教育など、大学教育全般にかかわる学生の成長に必要不可欠な支援として認識されつつあり、学生の「書く力」を育成するライティングセンターを設置する大学が増えてきていることを問題意識とした。そして、大学におけるライティングセンターの役割とは何か、「書く力」を育成する支援が大学教育にどのような影響を及ぼすのか、ということについて参加者とともに考えることを目的とした。

分科会の午前の部では、ライティングセンターを大学として設置している、早稲田大学ライティング・センター、愛知淑徳大学ライティングサポートデスク、関西大学ライティングラボについて、センター設置までのプロセスや、設置後の状況、支援内容などについて報告いただいた。

事前にコーディネーターからは、各報告者に以下のような内容の報告を依頼していたが、佐渡島紗織先生（早稲田大学）、外山敦子先生（愛知淑徳大学）、小林至道先生（関西大学）の三先生による

真摯なご報告によって、こういった分科会でありがちなマニュアルを求める雰囲気は一掃され、参加者は自身の大学の状況に当てはめながら、各自課題を抽出していた。当然、参加者の関心は各大学の置かれる状況によって様々であったが、各報告者の報告内容に、現在の形だけではなく、そこに至るプロセスや課題の変遷も充分に含まれていたことが、このような空気感を醸成した要因である。

【コーディネーターから各報告者に依頼した内容】
・ライティングセンター設立までの経緯（ライティング支援に対する大学の認識の変化等）
・ライティングセンターの趣旨・目的、活動内容、支援の領域
・組織体制（ライティングセンター内と、学内での位置づけ）
・チューター育成システム

分科会の午後の部では、まず、参加者から提出された多くの質問に対して、各報告者から回答と補足説明を行った。質問の内容には、ライティング支援の実施やライティングセンターの開設・運営に関する課題が集約されていると思うので以下にすべて示すこととする。

【センター全体に関する質問】
・センターの成果指標となるものは何か。特に学生の質保証という観点において定めているもの（今後、予定しているものでも可）があれば、ご教示いただきたい。
・複数個所で支援を展開する上での共通事項と個別事項をお聞かせください。
・利用者数やその内訳の変化の要因となる取り組み（特に改善された点など）があれば教えていただきたい。
・「広報」、特に教職員への周知法についてのお考えをお聞かせください。
・ガイドブック等の作成方法や、専門分野ごとの特性に対する対策、学生への配布方法についてお聞きしたい。

【チューターの育成・支援内容に関する質問】
・チューターを研修する講師は誰か。
・引用方法の指導をセンターでされていますか。
・長い文章の場合、チューターは事前に目を通すのですか。
・支援対象はどこまでか。
・チューターを学部生に任せる際の考え、今もっておられる案を教示いただきたい。
・指導手順の共有、チェックシート化やロールプレイ型の研修を増やしたことで、チューター間の支援の格差はどれぐらい改善されたのかをお聞きしたい。
・個人情報の取り扱いの観点において、センター利用学生の情報はどのように扱っているのか、ご教示いただきたい。また､他部署（学部含めて）と共有する場合、本人の了解を得ているのか、チューターに対しては誓約書の形で書面で取り交わしているのかも併せて伺いたい。
・セッション後のフォロー（アフターフォローメールなど）について詳しくご教示いただきたい。

【正課科目や教員との関係に関する質問】
・日本語表現等の正規科目の講師はどのような人か（クラスサイズも知りたい）。
・日本語表現系の開講科目との連携はどうなっていますか。
・期末レポートなどの場合、指導しないでほしいと言ってくる教員がいた場合、どのように対応しているのか。
・英語の文章の場合、センターで指導すると飛躍的にレポート（英作文の課題等）の点数が上がると思いますがそれでいいのでしょうか。
・科目を担当しながらアドバイザーとしても兼務されている先生方のモチベーションの維持や教育の質保証はどのようにしているのか、お聞かせいただきたい。
・チューターの指導に対する教員からの意見はあるか。
・正課科目との兼ね合いについてお聞きしたい。

これら多くの質問に対し、各報告者から具体的な事例を交えた回答と補足説明がなされ、さらにその後、４～５名のグループに分かれて、各大学

のライティング支援・指導の取り組み状況や課題をもとにグループディスカッションを行った。そして、各グループで抽出された課題を全体で共有しつつ、各報告者からコメントをいただいた。

3．コーディネーターの所感

ライティングセンターの設置やライティング支援の本格実施に至る出発点の多くは、三大学の報告を見ればわかるように、学部・学科単位、あるいは教員個人・科目単位の取り組みであり、そこから成長・発展させてきたプロセスに共通の原理原則があるわけではない。また、ライティング支援を開始するまでの課題と開始してから見えてくる課題も当然ある。

つまり、他の大学でやっているようなライティングセンターを設置したり、ライティング支援を行ったりすることを目的とするのではなく、自身の大学の学生をよく見ながら、「書き手をよくする」ためにどのような支援が適切なのか、各大学がそれぞれの状況に応じた形を模索し、できることを実施し続けていくことが重要なのである。そのプロセスが、支援を受ける学生のみならず、支援を行うチューターや教員を成長させ、やがて大学全体へと波及していく。

三大学の報告からは、時間をかけながら、大学内の様々なハードルを越えていく様子が充分すぎるほど伝わってきた。そして、その様子がそのままライティングセンターやライティング支援の「継続性」を担保しているのだと強く感じた。

本分科会が内容的に非常に充実したものとなった要因は、ひとえに報告者の三先生が、充実した資料に基づく報告や参加者とのディスカッションにおいて、何事も包み隠さずご発言いただいたお陰である。この姿勢が参加者にも充分伝わっていた。

早稲田大学ライティング・センターにおける指導と運営

早稲田大学　国際学術院　教授　　佐渡島紗織

大学コンソーシアム京都
第21回FDフォーラム「大学教育を再考する」
2016年3月5日・6日京都外国語大学

第10分科会
「大学におけるライティング・センターの役割」

早稲田大学ライティング・センターにおける指導と運営

早稲田大学　国際学術院
佐渡島紗織

1

次第

1. 学生にとってライティング・センターとは
2. 大学と教員にとってライティング・センターとは
3. チューターにとってライティング・センターとは

2

1. 学生にとってライティング・センターとは

3

学生にとって…高校にはない学びの場

◆対面、個別指導(45分間)
◆自由利用
◆利用者が文章・課題を持参
◆対話で文章を構想・検討

- 本キャンパス(毎日)
- 理工キャンパス分室(週2回)
- 人間科学キャンパス分室(週2回)
- 生命科学キャンパス分室(週1回)

4

学生にとって…ライティングは「過程」で

■米国　1980年代　Writing as a Process 運動
文章は、書いている途中で指導することが有効

■日本　2010年代　国語科教科書
文章作成の途中で文章を検討させる指導は少ない。

光村図書（小学校2011、中学校2012）
文章作成後、最終稿を学級全体で共有し感想を述べ合う活動がほとんど。

学校図書（小学校2011）
書き途中で児童同士がアドバイスし合うよう手引きしている単元が約半数。

↓

学生にとっては、勇気のいること

5

学生にとって…他人を介在させる

「ぼくは、人に文章をいじられるのは嫌です。だから、ライティング・センターには行かなくてもいいですか？」（授業で）

全学生の 約3% が利用！

（2015年度　3655セッション、1530人利用）

↓

一度、来訪すると・・・

「チューターとの対話の中で、自分の考えを客観的にとらえ直せた。自分一人ではできなかったと思います。」(アンケート)

「他人に質問してもらうことで、より具体的な説得力のある文章になった。」(アンケート)

6

第10分科会

学生にとって…利用自体が学習（予約）

■前日夜中までは、オンラインで予約

■当日は、受付で予約

■飛び込みも可

●ライティング・センターで検討してから提出するためには、早く草稿を書き上げなければならない。

●セッションの開始時に、チューターに課題や来訪目的を説明しなければならない。（事前に文章を送らない。）

7

学生にとって…利用自体が学習（言語選択）

6カテゴリー からセッション予約が可能

◇英語文章を英語で検討するセッション

◇英語文章を日本語で検討するセッション

◇英語文章を中国語で検討するセッション

◇日本語文章を日本語で検討するセッション

◇日本語文章を英語で検討するセッション

◇日本語文章を日本語教育専門家と検討するセッション

（例）英語文章、日本語セッションで内容と構成を決め、英語セッションで表現を検討する

8

学生にとって・・・文章に対する責任を負う

ライティング・センターの指導理念

《紙をよくするのではなく、書き手をよくする。》

チューターは、辞書やコーパスをみて一緒に考える。書き手が修正する。

チューターは書き込み作業を促し、書き手がどうするかを決める。

チューターが修正案を複数示し、書き手が選ぶ。

書き手が考えている事柄を話し、チューターが聴きとってメモや図にする。

・・・書き手のオーナーシップを護る支援

9

学生にとって…文章検討で考えを深める

「書かれ方」と「内容」は一体

（例）主語の検討⇒内容の確認

罪悪感を持ちながら反社会的行動で仲間に同調した経験はどのようなものか。

罪悪感を持った故に反社会的行動で仲間に同調しなかった経験はどのようなものか。

チューター：主語は「経験」ですね。経験を対象とする研究なのですか。

書き手：いやあ、罪悪感についての研究なんですけど・・・。罪悪感を持ったときのことをインタビューで聞いて、それがどう影響するか・・・。

チューター：主語は、「経験」でいいですか？

修正

罪悪感は、同調行動にどのように関連するか。

罪悪感は、非同調行動にどのように関連するか。

10

学生にとって…学問を行う姿勢を身につける
剽窃に関する学生の認識

大学2年生、3年生28人への調査（2008年）

本に書かれている特定の部分を、自分の文章の中で紹介しながら意見を述べます。次のどの書き方が適切ですか。

1. 本の記述を自分のことばに言い換えて＜自分の考えの一部として＞書く。 数名
2. 自分のことばに言い換えたうえで＜人が考えていることが分かるように＞書く。 2割
3. 自分のことばに言い換えたうえで出典を示す。 半数
4. 引用をして出典を示す。 2割

出典は示さなくてよいと考えている。（1. の数名と2. の2割）

1. ←「ずっとこのように書いてきた。」
2. ←「塾でそうするように教わった。」

引用はしない方がよいと考えている。（8割）

←「引用をすると、ただ書き写しているので、文章が幼稚に見えてしまう。」

学生にとって…学問を行う姿勢を身につける
剽窃に関する学生の認識

剽窃をした学生（毎学期、数人発覚）

◆話題集を作ってUSBに保管している。レポートで出そうと思うテーマについて、複数のインターネット・サイトから文章をコピーして貯めておく。

◆レポート課題が出たら、ネットで検索して、種々のサイトを読み、どの記述が自分の考えに一番近いかを見て、それをコピーする。（『スルー・プット』）

何のための学問なのかが理解できていない。

⇒これまでに発表された先人達の研究成果は大いに盛り込んでよい。

⇒誰が、どこで、何と言ったかを、そのまま報告すればよい。

⇒先人達の築いた知識の「穴」「不足」を埋めるべく、自分の考えを主張すればよい。

第10分科会

学生にとって…学問を行う姿勢を身につける
大学入試に向けた小論文指導

資料　泉万珠男編(2010)『新・小論文演習ノート』36版、p.24-25

◆「人口問題が関わっていることは確かである。」本当にそうと言えるのか、誰かがそうと主張したのか、不明。

◆「具体的な数字を挙げたのも説得力を高め」ているという評。
⇔調査元は示されているが、出典は示されていない。

◆歴史上の重要な提案について書いている。⇔引用されていない。(いつ、どこでの発言か不明)。

学生にとって…学問を行う姿勢を身につける
日本の国語科教科書は変わりつつある

資料　光村図書　小学校四年下

◆書き写したら引用する。 ◆参考にした本や記事を載せる。

アメリカの小学校、3年生が書いたレポート(1995年)

14

学生にとって…非母語言語を使って考える
(「文法チェック」、母語の活用)

■文法と内容は連動

来訪目的を「文法チェック」と記入する人多い。

⇒実際には、「文法」を超えている問題が多い。

⇒文法を検討するには、意図の確認が必要。 対話で文脈を考慮して修正。

■意図を説明する際に母語が有効 (佐渡島,他2009)

書き手が日本語(母語)で話しているセッション

⇒書き手がセッション全体の37.5%話していた

書き手が英語(非母語)で話しているセッション

⇒書き手がセッション全体の17.1 %話していた

15

学生にとって…

- 高校にはない学びの場で、新規利用には勇気がいる
- しかし、利用すること自体が学習
- 文章に対する責任を負い
- 書くことによって考える
- 学問を行う姿勢を身につける
- 非母語を使って考える

16

2. 大学と教員にとって ライティング・センターとは

17

早稲田大学ライティング・センター

18

第10分科会

学内での位置づけ

グローバル・エデュケーション・センター
管理委員会
全学共通・基盤教育

- アカデミック・ライティング教育部門
- 数学教育部門
- 英語教育部門
- 統計教育部門
- 情報教育部門

19

大学と教員にとって…二重の教育体制

早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム

大学院生が指導に当っている

教員 4名
日本語担当助手 3名

大学院授業「学術的文章の作成とその指導」
15週間・対面授業

- ライティング・センター チューター 25名
- 「学術的文章の作成」 指導員 60名

英語担当助手3名

20

大学と教員にとって…質保証 毎週四つのミーティング

■チューター・ミーティング（1時間半）全員
チュータリング研修、研究

■スタッフ・ミーティング（1時間半）教員と助手
審査報告、分室報告、担当業務報告

■教員ミーティング（1時間）教員のみ

■助手ミーティング（1時間）助手のみ

21

大学と教員にとって…質保証 チューター募集と研修

学内すべての研究科から年に2回募集

書類審査　面接審査

新人研修
導入研修　5科目(全2時間)
実地研修(全10回)

全員参加の週研修
毎週月曜12:15-13:45（1時間半）

22

大学と教員にとって…質保証 新しい院生ポジション

- 新人研修開始
- 独り立ち審査に合格
- 教育補助審査に合格

教務補助（時給1100円）
教育補助（時給2000円）

23

大学と教員にとって…分野を横断する領域

多くの教員がもつ誤解

◆「書かれ方」は「専門分野の内容」を知らなければ指導できない
⇒学部内でライティング授業を設置している学部
◆書ける人は、書き方を教えられる
◆教員でないとライティングは指導できない

●院生を育成、指導させる
●多様な分野のチューターがライティング指導について学ぶ
●チューターが多様な専門分野の書き方を勉強

24

第10分科会

大学と教員にとって…授業と連携

「私達は、チューターさんが書き直したレポートを読むことになるのですね。」という誤解

学部・研究科運営委員会で機能を説明

■学部授業と連携

レポート課題でライティング・センター利用を推奨

教員が予め評価基準をライティング・センターに知らせる

■ゼミと連携

年度始めに、全員で訪問

（訪問クラスを募る）

■オンデマンド授業で推奨

25

大学と教員にとって…他箇所と連携

■図書館

ワークショップを共有

（図書館→検索エンジン使用法、ライティング・センター→引用、文献リスト）

図書館の中にセンターを置く　コモンズとして位置づける

■学生相談室と連携

留年を重ねて引きこもりがちな学生を個別支援

学習障がいのある学生を個別支援

ITリテラシーに弱い学生を個別支援

26

大学と教員にとって…個別指導から自立へ

◆学生は一斉授業で得た「原則に関する知識」を適用できるとは限らない

英語ライティング授業、日本語ライティング授業で得た知識を生かす

◆状況に埋め込まれた学習の場

⇒「あ、こう書けばよいのですね。」

⇒「案外、書けていたとわかり、安心しました。」

文章を診断する観点を授業で教える

⇒その観点から文章を診断し修正する体験を積ませる

⇒自立

27

大学と教員にとって…

- 二重の教育体制が成立する
- 質保証を丁寧に
- 分野横断型の指導が可能
- 他箇所との連携
- 学生の自立を目指す

28

3．チューターにとって ライティング・センターとは

29

チューター作業用机と控室

30

第10分科会

チューターにとって…文章指導の専門家に

毎週の研修テーマをチューターと助手が企画

◆**文章診断**の練習
◆セッションの**始め方、終わり方**を練習
◆**書き手の気づき**を促す質問
◆**非母語**で書いている場合の対応／非母語で対話する場合の対応
◆**長い文章**を扱うセッション
◆書き手に**書き込み作業**をさせて気づきを促す方法
◆専門的な**分野の論文**を読み、構成などの慣習を知る
◆**ブレーン・ストーミング**を行うセッション
◆アメリカで刊行されている**チュータリング本**の購読
◆**セッション録音文字化原稿**の分析
◆**個人ファイル**の中の文章を使った話し合い

31

チューターにとって…互いに学び合う

32

チューターにとって…さまざまな成長

《傾聴する姿勢》

チューターの言葉にならないよう、「書き手の言葉」で文章を作っていくことの大切さを知った。（10春MA1）

《対話を重視する》

自分が、教師ではなくチューターになってきたのを実感している。最初はせっかちにどんどん答えを提供していたが、だんだん対話によって進むセッションができるようになった。（08秋AJ3）

《書き手に応じた指導》

書き手が何を言いたかったかをよく聞くようにすると、アドバイスの方針が見えてくる。（09春SS3）

その書き手にしか書けない文章を書くお手伝いという謙虚な姿勢を持つ。書き手が変わる瞬間を楽しむ。他人に相談するのはストレスなのだから45分以上の価値を与える。（10秋MM4）

33

チューターにとって…学びの往還

《他者と自分》

ベテランか新人かを問わずに、チューターとしてまだ勉強できることがある。アーカイブでも生セッションでも、互いに見合ってレパートリーのバリエーションを増やしていきたい。（10秋VY4）

《書き手とチューター》

私は、博士論文を執筆する書き手で、自分でもセッションを受け、また人に助言を与えるチューターです。自分のセッションについて人から助言も受けます。これらが同時に起きていて、すべての経験が他の経験に役立っています。（09春SK4）

（佐渡島・太田,2014）

34

チューターにとって…ライティング指導のできる大学教員にライティング指導のできる企業人に

チューターA:英語教育＋ライティング・センターの立ち上げ（桜美林大学）
チューターB:日本語教育＋ライティング・センターの立ち上げ（中央大学）
チューターC:日本語教育＋初年次ライティング授業（日本工業大学）
チューターD:文学の授業＋ライティング授業（金沢大学）
チューターE:教育工学＋ライティング授業＋WCの立ち上げ（はこだて未来大学）

35

チューターにとって…副専攻に匹敵するグループ研究成果

2015年秋　チューター自由研究

◆ある日本語非母語話者が自立していく過程（事例研究）
◆〈書き手の学年〉と〈一日の訪問時間帯〉による「悩み」の違い（クラスター分析）
◆セッション後アンケート1万件の自由記述欄の分析（テキスト・マイニング）
◆新人トレーニングで使う評価シートの使いやすさ評価（試用とインタビュー）
◆理工系利用者の論文執筆過程（観察とインタビュー）

36

第10分科会

チューターにとって…

- 文章指導の専門家に
- ピアで学び合う場
- 書き手として、指導者として、人として成長
- 理論と実践、書き手と支援者という学びの往還
- 就職に有利、企業で活躍
- ライティングに関する研究

37

成果調査など

太田裕子・佐渡島紗織・冨永敦子・齋藤綾子(2012)「大学初年次日本語アカデミック・ライティング授業における帰国生と留学生の文章力」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』8、pp.337-375

太田裕子・佐渡島紗織(2013)「『自立した書き手』を育成するライティング・センターの研修とチューターの意識― 早稲田大学における実践事例とPAC分析 ―」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』9、pp.237－278

佐渡島紗織・吉野亜矢子(2008)『これから研究を書くひとのガイドブック―ライティングの挑戦15週間―』ひつじ書房

佐渡島紗織(2009)「自立した書き手を育てる」全国大学国語教育学会編『国語科教育』66、pp.11-18

佐渡島紗織(2009)「早稲田大学における学術的文章作成授業―2年目における成果と課題―」『初年次教育学会』2-1、pp.72-79

佐渡島紗織・志村美加・太田裕子(2009)「日本語母語話者が日本語で英語文章を検討するセッションの有効性」早稲田大学国際教養学部紀要『Waseda Global Forum』5、pp.57-71

佐渡島紗織・冨永敦子・太田裕子・齋藤綾子・宮本明子(2012)「早稲田大学における学術的文章作成授業の成果―大学院生が個別指導するeラーニング初年次授業―」『大学教育学会誌』34-1、pp.119-127

佐渡島紗織・太田裕子・内田夕津・冨永敦子・齋藤綾子・澤正輝・P. ボイド・他(2013)『文章作成チュータリングの理念と実践』ひつじ書房

佐渡島紗織・太田裕子(2014)「文章チュータリングに携わる大学院生チューターの学びと成長」『国語科教育』75、pp.64-71

佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄編(2015)『レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド―大学生・大学院生のための自己点検法29―』大修館書店

佐渡島紗織・宇都伸之・坂本麻裕子・大野真澄・渡寛法(2015)「初年次アカデミック・ライティング授業の効果―早稲田大学商学部における調査―」

早稲田大学オープン教育センター編(2012)『大学教育推進プログラム　全学規模で行う学術的文章作成指導―大学院生が個別フィードバックする初年次eラーニング・プログラム(平成22~24年度)最終報告書』

38

御清聴ありがとうございました

各大学での御発展をお祈り申し上げます

sadoshima@waseda.jp

39

第10分科会

地方中堅・中規模校における「ライティング支援」の実践と課題

愛知淑徳大学　初年次教育部門　准教授　　外山　敦子

2015年度
第21回FDフォーラム

第10分科会　大学におけるライティングセンターの役割

地方中堅・中規模校における「ライティング支援」の実践と課題

愛知淑徳大学初年次教育部門 准教授　外 山 敦 子

平成28年3月6日(日)10:00～15:30
京都外国語大学 1号館154教室

発表の構成

2

1. 大学紹介
2. 「ライティングサポートデスク(WSD)」開室の経緯
3. WSDの業務内容と運営方法
4. チューターの育成
5. 2015年度開室実績
6. ライティング支援の「成果」と課題
7. まとめ

1-1. 愛知淑徳大学の紹介

1905年愛知淑徳学園設立
1975年開学(女子単科大学)→1995年共学化
学部生8,900人／院生60人、教職員230人

長久手キャンパス
愛知県長久手市
文学部　人間情報学部
心理学部　メディアプロデュース学部
健康医療科学部　福祉貢献学部

星が丘キャンパス
愛知県名古屋市千種区
交流文化学部　ビジネス学部

各種センター部門（両キャンパス設置）：情報教育センター　国際交流センター　コミュニティ・コラボレーションセンター　キャリアセンター　教職・司書・学芸員教育センター　健康スポーツ教育センター
初年次教育部門　外国語教育部門　教養教育部門　会計教育部門

3

2-2. 初年次教育部門〈全学日本語教育〉組織図

4

初年次教育部門
- 役職者：部門長1人・主任2人(兼務／任期2年)
- 専任スタッフ：特別契約教育職員(准教授1人・講師5人・助教1人)
- 事務組織：教務事務室(兼務)

全学日本語教育運営委員会
- 全学日本語教育関連実施事業の統括と運営を担う
- 構成員
  - 委員長(全学日本語教育主任)
  - 委員(各学部1人＋初年次教育部門2人)

- 基幹教育運営委員会
- 高大連携推進委員会
- 高大連携教育運営委員会

主要実施事業

学力測定	入学時学習力調査(国語)
開講科目	全学共通科目「日本語表現」(全9種)
教材作成	日本語表現テキスト 各種オリジナル教材
学修支援	ライティングサポートデスク
資格取得支援	漢字検定有料受検 日本語検定無料受検
FD/研究	教育実践報告会 授業アンケート
広報	広報誌、研究年報 活動報告書

2-1. ライティングサポートデスク(WSD)開室に至る経緯

5

年	事 項
2000～05	学内で学生の日本語運用力低下が話題。各学部がライティング科目開講。
2008～09	研究助成採択事業(文学部国文学科) 「全学的国語力養成のための教育課程の開発編成と教材の作成」
2010	全学共通科目「日本語表現」(9科目／全学必修1科目含む)の開講 開講主体「全学日本語教育部門」の新設
2012	大学院開設科目「学術的文章作成法・指導法」の開講 「ライティング・クリニック」(対象者限定)開室
2014	「全学日本語教育部門」を「初年次教育部門」に改称
2014～15	研究助成採択事業 「「対話」を重視する「全学的ライティング支援」の実践的研究」 「ライティングサポートデスク(WSD)」(2014後期、全学支援スタート)開室

期間限定(2年間)

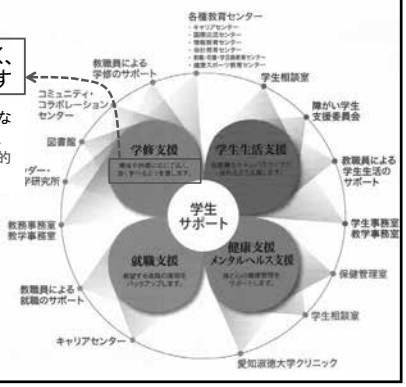
2-3. 愛知淑徳大学における学修支援の現状と課題

6

興味や目標に応じて広く、深く学べるよう支援します

多様な進路選択に資する豊富なカリキュラムは揃ってるものの、基礎学力定着のための、全学的な学修支援施設は未整備。

① 科目の設置だけでは、目的達成は不可能。
② まずはライティング支援から。
③ 本学の実状に即した運営方法とは？



3-1. ライティング支援に共通する理念

7

「自立した書き手」の育成を目指す

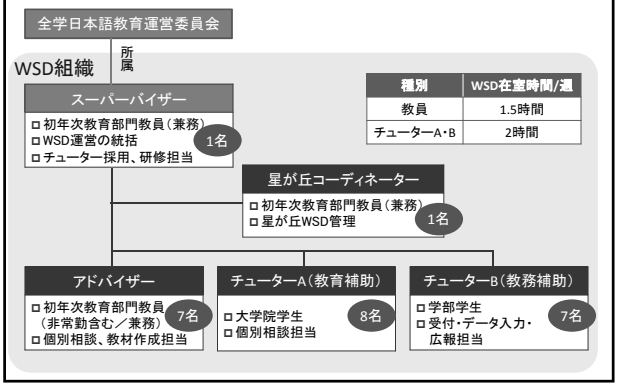
1. 「対話」を重視する
2. 「紙」を直すのではなく、「書き手」を育てる
3. 文章作成の「過程」を支援する

WSD＠長久手キャンパス

WSD＠星が丘キャンパス

3-2. WSD組織図

8



3-3. WSD開室方法

9

- 開室期間、時間
  - 授業開講期間（4～7月、10～1月）
  - 1日あたり2～4コマ程度
- 開室場所
  - 初年次教育部門共同研究室（長久手・星が丘）
- 支援の領域
  - 日本人学生を対象とした日本語ライティング
  - 授業の課題レポート、進学・留学・就職関連書類、サークル関係の文章、スピーチ、手紙（礼状など）
  - 創作物（小説など）は対象外

- 【例】開室時間割　2015年度後期
  - 長久手キャンパス

時限	月	火	水	木	金
1					○
2	○		○	○	○
昼	○	○	○		○
3	○	○	○	○	○
4	○	○	○	○	○

  - 星が丘キャンパス

時限	月	火	水	木	金
1					○
2			○		○
昼	○	○			○
3	○		○	○	○
4			○		

3-4. 業務内容①個別相談　相談業務の流れ

10

1. 来室受付

ウェルカムシート記入

原則予約不要

2. セッション

1回30分

3. セッションの記録作成

持ち込み文章コピーとともに

4. 個人ファイルの保管

保管は4年

次のセッションで活用

3-5. 業務内容②個別相談　相談ブースの仕様

11

3-6. 業務内容③その他の学修支援

12

1. 図書の閲覧・貸出

2. ミーティングスペース利用

プロジェクター、PCあり

3. ブックレット・補助教材の提供

作成は教員

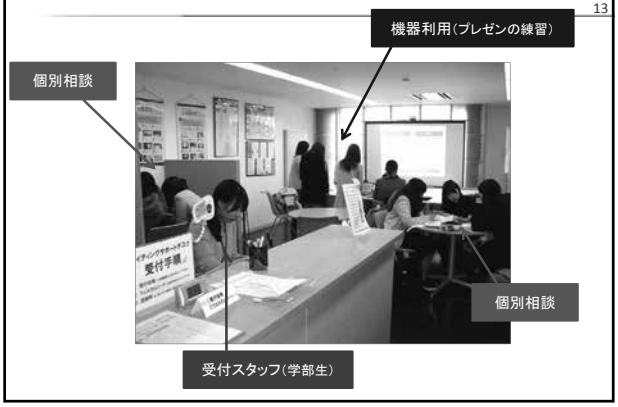
4. かわら版発行

月1回学生編集

第10分科会

3-7. 開室風景　長久手キャンパス

13



4-1. スタッフ研修①　新人研修

14

3月	採用決定	
4月	新人オリエンテーション	
	理論研修（30分/週）	実地研修（勤務時間）
5月	研修① セッションの進め方	振り返り ⇔ 助言 受付業務担当 研修① セッション見学 研修② セッション実践（指導員あり） チューターB
6月	研修② 模擬セッション	振り返り ⇔ 助言 チューターAに昇格 研修③ セッション実践（指導員なし） チューターA
7月		

4-2. スタッフ研修②　スタッフミーティング

15

✓Web会議（月1回）
✓総括会議（半期1回）　→写真

4-3. スタッフ間の情報共有　Web版業務日報

16

✓Googleスプレッドシートを用いた業務の引き継ぎ

5-1. 開室実績①　利用者数

17

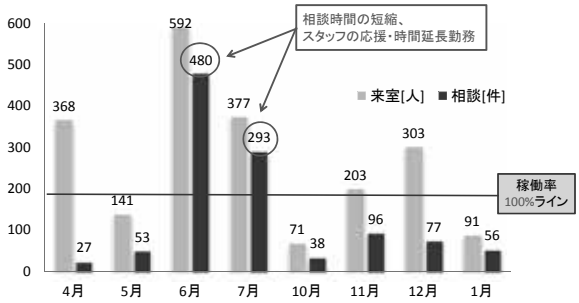
2015年度開室実績　（カッコ内　昨年度実績）

キャンパス	来室 [人]	相談 [件]	開室 [コマ]	稼働率 [%]
長久手	1,585（414）	778（249）	475（159）	82（78）
星が丘	571（139）	342（71）	294（58）	58（61）
計	**2,156（553）**	**1,120（320）**	**769（217）**	**73（74）**

全学の24%　　全学の13%

5-2. 開室実績②　月別利用者数（2015年度）

18



第10分科会

5-3. 開室実績③ 正課科目との連携

19

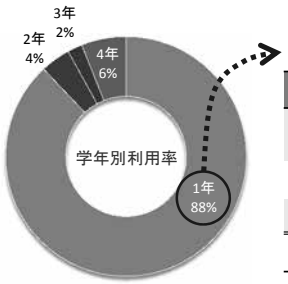
✓ 2015年度実績

開講主体	科目名	学年	履修者	連携の内容
初年次教育部門	日本語表現T1（全学必修）	1	2,150	授業担当者による利用奨励 小論文の個別指導
初年次教育部門	日本語表現T2	1	1,500	授業担当者による利用奨励 グループ発表／レポートの個別指導
初年次教育部門	日本語表現A1	2-3	40	来室義務 レポートアウトラインの個別指導
人間情報学部	卒論プロジェクトⅢ	4	15	来室義務 卒論研究目的文の個別指導
人間情報学部	卒論プロジェクトⅣ	4	15	来室義務 卒論要旨（抄録）の個別指導

＊ゼミや授業単位でのWSD見学（含：利用ガイダンス）のみの連携は、上記「実績」に含んでいない。

5-4. 開室実績④ 学年別相談利用率

20

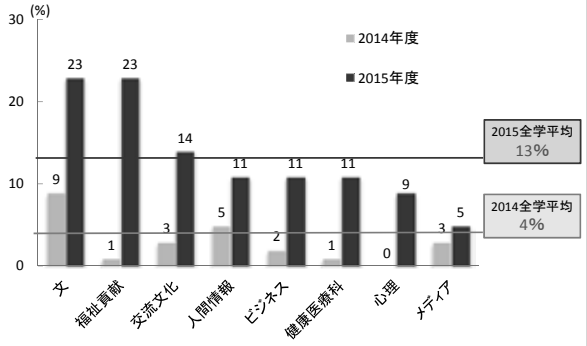


1年生 相談内容内訳

持ち込み文章	件数
初年次教育部門 開講科目の課題	886
上記科目以外の課題	67
その他	32
計	985

5-5. 開室実績⑤ 学部別相談利用率

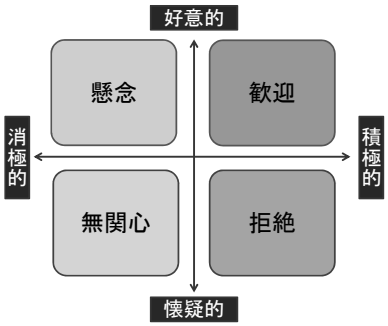
21



6-1.「成果」と課題① WSD発足で大学はどう変わったのか

22

✓ WSD発足時における学内教職員の反応

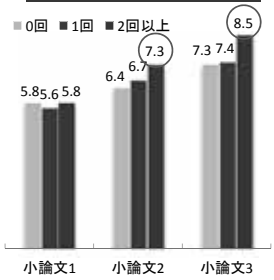


6-2.「成果」と課題② WSD利用回数と小論文得点との相関性

23

2015年度前期のWSD利用回数

小論文（各10点満点）の得点平均



6-3.「成果」と課題③ 「利用者アンケート」（の／から見える）問題

24

✓「来室の効果はあったか」に対する回答（セッション終了直後と学期末の回答差）

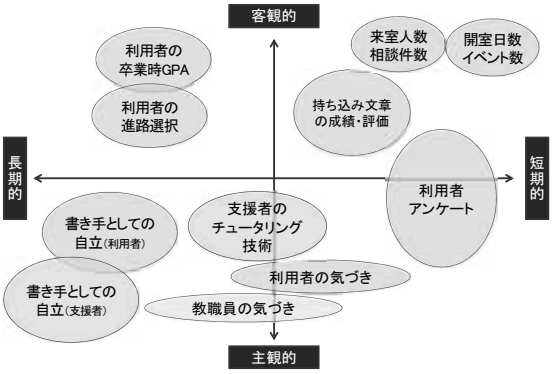
✓ 期末アンケートの自由記述

肯定的意見	否定的意見
✓ すごくよかった、という意見をよく聞く。 ✓ 考えがまとまってすっきりした。 ✓ 小論文の点数が上がりました。 ✓ 教えるのではなく、答えにたどり着くプロセスを導いてくれ、受け身になることなく楽しく相談できた。	✓ スタッフによって効果のある人とない人の差が大きい。 ✓ チューターのアドバイス通りに書き直したのに、点数が上がらなかった。 ✓ スタッフの数が少なすぎて開室時間も少ない。利用したくても人が多くてできない。

第10分科会

6-4.「成果」と課題④　何をもって「成果」とするのか

25



7-1. まとめ①　大学のライティング支援施設が抱える課題

26

① 利用者が増えない／偏りがある。
- 来室に影響を与える4つの要因（正宗2012）
  ①施設に関する知識　②来室の負担　③メリット　④強制力

② 学内の知名度が低い／理解が進まない。
- ライティング支援への誤解や、過剰な期待
- 広報の仕方にも問題あり

③ 学部教育、学内他部署との連携がとれない。

④ 複数のキャンパスへの展開が難しい。

⑤ 場所／予算／人（スタッフ）が十分確保できない。
- 支援が必要な学生が多い　←→　支援ができる大学院生が少ない

⑥ チューターがなかなか育たない／技術レベルが一定でない。

⑦ ヘビーユーザーと、依存傾向の強い利用者の別←→自立した書き手

⑧ 成果の測定方法に課題／時間が必要。

7-2. まとめ②　持続可能なライティング支援システム構築のために

27

① まずは「自校分析」から。
- コアユーザーをイメージする。
- 自校の「強み」を生かした開室方法。
- 他大学の成功例が、自校で成功するとは限らない。

② はじめから立派な組織・施設でなくてもよい。
- ライティング支援専用の空間は、絶対条件ではない。
- 「教員－職員－学生スタッフ」三者の協働運営が理想。だが、こだわる必要はない。

③ 学内各方面の理解と協力なくしてライティング支援は成立しない。
- 正課カリキュラムとの連携、他部署との連携を、できるところから。
- 特に、教員の理解と支援を得るのは難しい。でも、諦めてはいけない。
- PRには、工夫が必要。

ご清聴ありがとうございました。

28

atoyama@asu.aasa.ac.jp（外山）

愛知淑徳大学初年次教育部門　検索

http://www.aasa.ac.jp/shonenji/nihongo/

第10分科会

関西大学ライティングラボの取り組みを通して大学教育のイマドキを考える

関西大学　教育推進部　特別任用助教　　小林　至道

大学コンソーシアム京都　第10分科会

関西大学ライティングラボの取り組みを通して大学教育のイマドキを考える

小林至道（nkoba@kansai-u.ac.jp）
（関西大学教育推進部特別任用助教）

2016年3月6日（日）
於：京都外国語大学

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

報告者について

■専門分野
- 教育学（教育方法論、初年次教育、メディア社会学）
  →ライティング支援方法の研究（2007年頃～）

■職務
- 文部科学省大学間連携共同教育推進事業＜考え、表現し、発信する力＞を培うライティング/キャリア支援（2012年10月～2017年3月）の特任教員
- 関西大学教育推進部特別任用助教（2013年4月～2017年3月予定）
  →ライティングラボの運営・管理
- 大学におけるライティング支援（図書館など）のアドバイザー（2011年～）

1

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

本日のお話の趣旨

■ライティングラボを運営・管理する立場から次の点を説明

1. ライティングラボの概要

2. 取り組み内容の変遷

2

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

1. ライティングラボの概要

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

取り組み（ライティングラボ設立）の背景

- 日本社会の構造変化とグローバル化
  →世代、立場、性差を超えたコミュニケーション能力の育成
- 大学のユニバーサル（大衆）化
  →学生の多様化への対応（学生支援・学修支援）が不可欠
  →米国におけるライティングセンターの役割に着目
- 「大学教育の質的転換」答申（文科省 2012年）など
  →教員が「何を教えたか」から、学生が「何を学んだか」へ

4

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

取り組み（ライティングラボ）の目的

（1）主体的学びの確立による大学教育の質的転換の実現
（2）コミュニケーションを形成・深化しうる人材の育成

→ライティングラボと授業カリキュラムとの連携
→学生個々のニーズに即した個別の学修支援体制の整備
→学生が自ら「考え、表現し、発信する力」を培う機会の提供

⇒大学の中だけではなく、社会の中でのキャリア形成の基盤となる「書く力」を、学生が身につけること

5

THINK+ACT KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

関西大学 ライティングラボとは？

■学部生の日本語文章作成（ライティング）を支援する施設

- 前身は「卒論ラボ」（2011年～）：文学部の卒論を支援
- 2012年から「ライティングラボ」に名称変更
  →管轄が、「文学部」から「教育推進部」へ
  → 支援対象者は、全学部生（約28,000人）に
- レポート、卒論、ゼミ・留学の志望理由書などが主な対象物
- 大学間連携GP＜考え、表現し、発信する力＞を培うライティング/キャリア支援の取組として運営（2012年10月～）

6 KANSAI UNIVERSITY

基本方針

- 訓練されたチューター（博士後期課程）が、個別に支援
- 専門的内容以前の、ライティングの基本スキルを支援
  →文章の構成、文献の探し方、引用の仕方、文章表現・表記
- 添削は行わず、学生の「気づき」を促す
  →学生の主体性を尊重、書く（書き直す）主役はあくまで学生
  →チューターは、文章作成上の問題点を学生と一緒に考える

7 KANSAI UNIVERSITY

支援体制

- スタッフ：特任教員3名、事務員1名、チューター24名
  ※2016年3月時点
- 場所
  千里山キャンパス1号館5階（卒論ラボ開設の2011年～）
  高槻キャンパス学生サービスステーション内（2014年10月～）
  総合図書館ラーニングコモンズ内（2015年4月～）

8 KANSAI UNIVERSITY

支援風景（千里山キャンパス）

第1学舎5階

総合図書館内

9 KANSAI UNIVERSITY

開室時期と相談時間枠

①開室時期：各学期、授業開始1週間後～期末考査期
→春学期（前期）：4月中旬～7月末（約70日間）
→秋学期（後期）：9月下旬～1月末（約70日間）

②相談時間枠：1セッション40分間、授業時間枠と対応

相談枠	A	B	C	D	E	F	G
時間	11：30～12：10	12:15～12:55	13:00～13:40	13:50～14:30	14:40～15:20	15:30～16:10	16:20～17:00

10 KANSAI UNIVERSITY

セッションの流れ

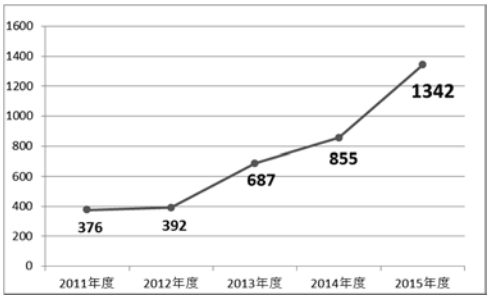
■1セッション（40分）＋情報共有の流れは、おおよそ次のとおり

（1）導入（5分）：相談申込用紙と予約システム画面（後述）による
「相談したいこと」、「締め切り期限」などの確認
文章診断およびヒアリング
（2）展開（30分）対話形式による相談内容への対応
（3）まとめ（5分）　セッションでしたことの確認、今後の課題
（4）指導履歴の記入：システム上に、相談内容、指導内容、所感、
連絡事項などを記入し、スタッフ間で共有
学生に、アフターフォローのメール送信

11 KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

個別相談利用件数の推移（5年間）



12

ライティングラボの成長と取り組み内容の変遷

■運営上どのような点を考慮しながら現在に至ったのか？
次の2点に焦点化して報告する。

（1）ラボの利用者数（学内での認知度）をいかに向上させるか
（2）学修支援としての質の保証をいかに担保するか
→運営体制の整備
→ライティング支援補助ツールの開発
→授業（カリキュラム）との連携
→広報活動上の工夫
→（授業時間外）ライティング講座の展開

13

2. 取り組み内容の変遷

2012年度
～運営体制の準備～

- 管轄部署の移管
- 全学展開による支援対象者の拡大
- 支援スタッフの新規任用、研修

2012年度：運営体制の整備①

■「千里山キャンパス第1学舎5階」の1箇所体制

- 特任教員3名（前GPから継続）、事務員1名（継続）
- チューター：春学期14名（前GPから継続8名、新規採用6名）
  秋学期17名（継続12名、新規採用5名）

■チューター（博士後期課程）の所属研究科の拡張

- 従来は、文学研究科、心理学研究科、東アジア文化研究科
- それらに加え、法学研究科、社会学研究科所属者を採用

16

2012年度：運営体制の整備②

■ チューター研修、ミーティングの実施

（1）チューター研修
- 新規チューター対象の導入研修（5月・11月に実施）
- 相談文章の形式や傾向の勉強会（秋学期に4回実施）

（2）ミーティング（年に6回実施：春学期4回、秋学期2回）
- チューターガイドライン（業務内容・支援方法）の検討、共有
- 学生対応（相談内容）にかんする意見交換

17

2012年度：ライティング支援補助ツールの開発

■『レポートの書き方ガイド（基礎篇）』の作成

→ライティングラボにおける支援の指針に

- 40ページ程度の初年次生向けのライティング・ハンドブック
  →準備（研究方法）編、文章編、構成編の3部構成
- 取り組みの広報も兼ねて、学内で広く配布
  ※2016年現在、約2万部（第5版）を配布

18

2012年度：授業（カリキュラム）との連携

■次のサイクルで、正課授業科目との連携を実施

①授業時間内でラボ利用ガイダンス（20～30分程度）の実施
②授業担当者によるレポート課題の提示とラボ利用指示
③学生は、授業時間外に、ラボの個別相談を利用

■連携実績

- 授業連携（①の実施数）：春学期6授業、秋学期9授業
  →そのほとんどが、共通教養科目、文学部の科目
- ラボ利用指示（②の数）：27件

19

2012年度：広報活動上の工夫

■教職員のライティングラボ認知と活用促進のため

- FD（12月）、シンポジウム（2013年3月）などイベントの開催
- ライティングラボ利用案内文書の作成と配布

■学生のライティングラボ認知と利用促進のため

- 『レポートの書き方ガイド（基礎篇）』の配布（前述）
- ライティングをテーマとした講演会、セミナーの開催（年3回）
- ライティングラボ利用案内リーフレットの作成と配布
- 「文章表現」ワンポイント講座の実施

20

2012年度：ライティング講座の展開

■文章表現ワンポイント講座

- 主に1・2年生が、文章を書くためのワンポイントを学ぶ
- 1回30分（昼休み：12:20～12:50）→単発・連続での参加可
- 講座タイトル例
  第1回「レポート・論文の日本語」、第4回「予告と順番」
  第6回「接続詞を使う」、第10回「引用の意味」 など
- 開講数と受講者数：春学期：全13回で54名（のべ人数）
  秋学期：全10回で54名（のべ人数）

21

2012年度：個別相談の月別利用者数（数値はのべ人数）

春学期	4月	5月	6月	7月	計
2011年度	5	39	79	56	179
2012年度	2	26	62	139	229
前年比	−3	−13	−17	83	50

秋学期	9・10月	11月	12月	1月	計
2011年度	40	53	71	33	197
2012年度	57	18	34	54	163
前年比	17	−35	−47	21	−34

- 前年度（376人）から2012年度（392人）は、微増にとどまる
  →10月以降の運営体制の変化、その準備がマイナス影響

22

2013年度
～支援環境の整備とプログラムの実践①～

・特任教員3名のうち2名が新規採用（4月～）
→報告者は、そのひとり

2013年度：運営体制の整備①

■「千里山キャンパス第1学舎5階」の1箇所体制

- 特任教員3名（継続1名、新規採用2名）、事務員1名（継続）
- チューター： 春学期20名（継続12名、新規採用8名）
  秋学期23名（継続20名、新規採用3名）

■チューター採用プロセス
学内公募→書類審査・面接→採用→導入研修

24 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：運営体制の整備②

■ チューター研修、ミーティングの実施

（1）チューター研修
- 新規チューター対象の導入研修（5月・11月に実施）
- 留学生対応研修（学内講師により10月に実施）

（2）ミーティング（年8回実施：春学期4回、秋学期4回）
- スタッフ全員の討議による指導内容・方法の検討
- 模擬セッションによる対応スキルアップ、支援方法の共有

25 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：ライティング支援補助ツールの開発

■『レポートの書き方ガイド（入門篇）』の作成
→レポート作成と大学生活との関係を学ぶことを目的
- 30ページ程度の初年次生向けのハンドブック
  →レポート作成に役立つ学内部署・施設の活用法を紹介
  →教員へのメールの書き方の実践（ワーク）
- 取り組みの広報も兼ねて、学内で広く配布
  ※2016年現在、約10,000部（第3刷）を配布

26 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：授業（カリキュラム）との連携

■連携サイクルは前年度を継承しつつ、連携対象を拡大

①授業時間内でラボ利用ガイダンス（20～30分程度）を実施
②授業担当者によるレポート課題の提示とラボ利用指示
③学生は、授業時間外に、ラボの個別相談を利用

■連携実績（授業連携＝①の実施数、ラボ利用指示＝②の数）
- 授業連携： 春学期12授業（前年6）、秋学期11授業（前年9）
  →経済学部、商学部の2授業が新規連携に
- ラボ利用指示： 33件（前年27件）

27 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：広報活動上の工夫 －学生広報の強化

■教職員のライティングラボ認知と活用促進のため
- 「レポートの書き方ガイド」（基礎篇・入門篇）の配布
- ライティングラボ利用案内文書の配布

■学生のライティングラボ認知と利用促進のため
- ライティングラボHPの開設（http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/）
- ライティングをテーマとした講演会の開催（年1回）
- 「ライティングラボ利用案内」リーフレット（改訂版）を配布
- ライティングラボのポスターを作成し、広く学内で掲示
- 「考動力」作文コンテストの開催（高校生：598編、大学生92編）

28 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：ライティング講座の展開①

■春学期の講座名を「レポートの書き方」ワンポイント講座に変更
→新入生のニーズを考慮、「レポート」支援の周知を兼ねて

- 主に1・2年生が、レポートを書くためのワンポイントを学ぶ
- 1回30分（昼休み：12:20～12:50） ※単発・連続で参加可
- 講座タイトル例
  第2回：レポートって、何を書けば良いの？
  第4回：文献って、どう探すの？ 第8回：問いの絞り込み方
- 開講数と受講者数：春学期：全9回137名（前年13回：54名）

29 KANSAI UNIVERSITY

2013年度：ライティング講座の展開②

■秋学期は、従前の文章表現ワンポイント講座を実施
→春学期＝レポートの形式面、秋学期＝文章全般の表現面

- 主に1・2年生が、文章表現上のワンポイントを学ぶ
- 1回30分（昼休み：12:20～12:50） ※単発・連続で参加可
- 講座タイトル例
  第1回：なぜ伝わりにくいのか？　第8回：段落の構成
- 開講数と受講者数：秋学期：全9回52名（前年10回：54名）

30

2013年度：ライティング講座の展開③

■キャリアセンターと連携のもと、他キャンパスで実施

（1）高槻ミューズキャンパス

- 春学期（6月下旬～7月上旬）に実施
- お昼休みに1回30分で全3回、受講者数は、61名（のべ人数）

（2）堺キャンパス

- 春学期（7月中旬）、秋学期（1月中旬）に各1回実施
- 授業時間枠＝90分（春学期は4時限、秋学期は2時限）
- 受講者数は、春学期17名、秋学期10名（のべ人数）

→千里山キャンパスで行ってきた連続形式の講座との比較検討から、
開催形式・時期・時間帯、内容（テーマ）などの有効性を検討

2013年度：個別相談の月別利用者数（数値はのべ人数）

春学期	4月	5月	6月	7月	計
2012年度	2	26	62	139	229
2013年度	19	167	131	150	467
前年比	17	141	69	11	238

秋学期	9・10月	11月	12月	1月	計
2012年度	57	18	34	54	163
2013年度	36	74	60	50	220
前年比	−21	56	26	−4	57

- 前年度（392人）→2013年度（687人）と295人増（1.75倍）に
- 秋学期の減少月についての原因分析と改善策の検討

32

ライティングラボ着任から1年間を通した分析と改善策①

（1）ラボの利用者数（学内での認知度）をいかに向上させるか

- 教員から何らかの課題が出されてこそ、支援のニーズが生起
- 学生の授業（課題）に対する年間バイオリズムを考慮

春学期 ↗ 夏休み ↘ 秋学期 ↘ 学園祭 → 冬休み ↗ 春休み

→レポート課題、ゼミの志望理由書などのタイミングの把握
→課題が出される少し前の時期から広報活動を強化
→気運上昇期に心を掴み、なるべく継続的な利用につなげる

33

ライティングラボ着任から1年間を通した分析と改善策②

（2）学修支援としての質の保証をいかに担保するか

- 学生の相談に来ないと、チューターのモチベーションは低下
  →支援の質の低下
  ⇒利用者数の向上は、支援の質の保証にも影響
- チューター個人の資質、能力への過度な依存は禁物
  →「チューターの入れ替わりは避けて通れない」から
  →どのチューターでも、一定水準の支援を提供できる必要

⇒運営体制を、「属人的」からより「組織的」に
⇒導入研修のプログラム内容、ミーティング方法の刷新へ

2014年度
～支援環境の拡充とプログラムの実践②～

- 特任教員3名のうち1名が新規採用（4月～）
  →前（文学部）GPから継続の特任教員がゼロに

第10分科会

2014年度：運営体制の整備①

■「高槻ラボ」開設に伴い、10月から2箇所体制に

（1）千里山キャンパス第1学舎5階
（2）高槻キャンパスC棟1階サービスステーション内

- 特任教員3名（継続2名、新規採用1名）、事務員1名（継続）
- チューター：春学期24名（継続16名、新規採用8名）
  秋学期26名（継続21名、新規採用5名）

■チューター採用プロセス
公募、教員・チューター推薦→書類審査→面接→採用→導入研修

36 KANSAI UNIVERSITY

2014年度：運営体制の整備②

■ チューター研修、ミーティングの実施

（1）チューター研修
- 新規チューター対象の導入研修（3～4月、9～10月に実施）
  →研修プログラム内容を刷新（後述）

（2）ミーティング方法の変更
- スタッフ全員でのミーティングが困難に（学業優先・効率性）
- 各曜日の代表者が、事前に支援現場の声を集約
  →各曜日の代表者＋特任教員での情報共有および検討会
  →検討および決定事項を、検討会後に支援現場に伝達・反映

37 KANSAI UNIVERSITY

導入研修のプログラム内容の刷新

【変更前】属人的
- 過去の研修ビデオ視聴
  →コミュニケーション
  →傾聴や質問の仕方
- 先輩チューターの相談見学
  →指導法のディスカッション
- レポートを題材に先輩チューターと指導内容の検討会
- 先輩チューターと模擬相談（ロールプレイ）

【変更後】組織的
- 業務説明
- コミュニケーション研修
- 学生なりきりレポート作成
- 課題発見ロールプレイ
- 文章作成の知識確認
- 先輩チューターの相談見学
- 相談タイプ別ロールプレイ
- 終了検定ロールプレイ

KANSAI UNIVERSITY

2014年度：ライティング支援補助ツールの開発①

（1）「レポートの書き方チェックシート」の作成と導入
→特に春学期、レポートにかんする次のような相談が急増

- レポートの基本的な書き方が分からない
- レポートにかんして、何が分かっていないかもわからない
- 何から始めればよいか分からない
- どういう手順で書き進めたらよいか分からない

⇒チューターが行っている指導手順を共有、チェックシート化

39 KANSAI UNIVERSITY

2014年度：ライティング支援補助ツールの開発②

（2）「ラボ利用証明書」の作成と発行

→教員から「ラボは結局、何をしてくれる所なのか？」の声
→ラボ利用指示を出してくださる教員へのフィードバックとして

- 利用学生の情報（持参物の有無、進捗状況など）
- 利用日（提出締め切り何日前にラボを利用したのか）
- チューターは、どういう点の指導をしたのか
- チューターからの一言メッセージ

40 KANSAI UNIVERSITY

2014年度：授業（カリキュラム）との連携

■授業連携のあり方をより深く
①授業時間内（20分～30分程度）でラボ利用ガイダンスを実施
②授業内で「レポートの書き方の基本」出張講義の提供
③授業担当者によるレポート課題の提示とラボ利用指示
④受講生は、授業時間外に、ラボの個別相談を利用

■連携実績（授業連携＝①の実施数、ラボ利用指示＝③の数）
- 授業連携：春学期15授業（前年12）、秋学期7授業（前年11）
- ラボ利用指示：48件（前年33件）

41 KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

2014年度：広報活動上の工夫 －前年度踏襲

■教職員のライティングラボ認知と活用促進のため
- 「レポートの書き方ガイド」（基礎篇・入門篇）の配布
- ライティングラボ利用案内文書の配布

■学生のライティングラボ認知と利用促進のため
- ライティングラボHPの更新（http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/）
- ライティングをテーマとした講演会の開催（年2回）
- 「ライティングラボ利用案内」リーフレット（2014年度版）を配布
- ライティングラボのポスターを作成し、広く学内で掲示
- 「考動力」作文コンテストの開催（高校生：1070編、大学生133編）

42 KANSAI UNIVERSITY

2014年度：ライティング講座の展開①

■講座名を「レポートの書き方」ワンポイント講座に統一
- 主に1・2年生が、レポートを書くためのワンポイントを学ぶ
- 1回30分（昼休み：12:20～12:50）

春学期：全9回シリーズ→レポートの書き方・手順を学ぶ
例）第2回：テーマ設定、第7回：主張の確認
秋学期：3テーマ×全3回→読み方、要約の仕方、レジュメ
例）批判的に読むとは？　要約のコツ

- 開講数と受講者数：春学期：全9回180名（前年9回：137名）
秋学期：全9回　61名（前年9回：52名）

43 KANSAI UNIVERSITY

2014年度：ライティング講座の展開②

■他キャンパスでの実施を拡充

	高槻	ミューズ	堺
実施時期	7月上旬	7月中旬 1月上旬	7月中旬 1月中旬
時間と回数	30分×全2回	30分×全4回	90分×1回 30分×2回
受講者のべ人数	107人	163名	15名

- 開催形式（回数・時期）、内容など、さまざまなパターンで実施
→学生の参加状況、アンケートを踏まえ、次年度に活かした

KANSAI UNIVERSITY

2014年度：個別相談の月別利用者数（数値はのべ人数）

春学期	4月	5月	6月	7月	計
2013年度	19	167	131	150	467
2014年度	38	115	152	257	562
前年比	19	−52	21	107	95

秋学期	9・10月	11月	12月	1月	計
2013年度	36	74	60	50	220
2014年度	59	76	91	67	293
前年比	23	2	31	17	73

- 前年度（687人）→2013年度（855人）と167人増（1.24倍）に
- 春学期に比して、秋学期全体の利用者数の向上が課題

45 KANSAI UNIVERSITY

2015年度
～取り組み成果の検証～

KANSAI UNIVERSITY

2015年度：運営体制の整備①

■「総合図書館コモンズ内」開設に伴い、3箇所体制に

（1）千里山キャンパス
①第1学舎5階　②総合図書館ラーニングコモンズ内

（2）高槻キャンパスC棟1階サービスステーション内

- 特任教員3名（継続3名）、事務員1名（継続）
- チューター：春学期27名（継続22名、新規採用5名）
秋学期24名（継続24名）

47 KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

2015年度：運営体制の整備②

■ チューター研修、ミーティングの実施

（1）チューター研修

- 新規チューター対象の導入研修（3～4月に実施）
- 新システム「TEC-book」導入に際する研修（4月）
- 学生相談支援センター講師（学内）による研修（4月）
- 志望理由書の支援に関して津田塾大学と合同研修（10月）

（2）ミーティング方法の再変更

- ミーティング週を設け各曜日のスタッフ間で検討→情報共有
  →ラボ利用指示の伝達系統の整備、理系学生への対応方法

48

2015年度：ライティング支援補助ツールの開発①

（1）TEC-bookの導入

→関西大学、津田塾大学の運用をモデルに、
ライティングセンターの運営に必須な機能を統合したシステム

①学生：ライティングセンターの相談予約、相談履歴の蓄積
②チューター：シフトの登録、全指導履歴の蓄積・共有
③運営管理者：相談体制の管理、データによる利用状況把握

⇒物理的に離れた3箇所体制でも、情報共有・管理が簡便に

49

ログイン画面

相談予約画面①（全体）

相談予約画面②（相談文書の選択）

相談予約画面③（相談場所・時間の選択）

第10分科会

2015年度：ライティング支援補助ツールの開発②

（2）「レポートの書き方ガイド（発展篇）」の作成

- 基礎篇を発展させた内容
- 支援現場のニーズ（声）を反映
  - →要約の仕方
  - →レジュメ・スライド作成の仕方
  - →レポートらしい表現集

- これまでに作成してきた補助ツールも掲載
  - →レポートの書き方チェックシート、サンプルレポート

54 KANSAI UNIVERSITY

2015年度：授業（カリキュラム）との連携

■連携サイクルの効率化を模索

①授業時間内（20分～30分程度）でラボ利用ガイダンスを実施
②授業内で「レポートの書き方の基本」出張講義の提供
→授業間連携による「合同ガイダンス＋講義」を試行的に導入
③授業担当者によるレポート課題の提示とラボ利用指示
④受講生は、授業時間外に、ラボの個別相談を利用
⑤ラボが開発したライティング・ルーブリックを介した連携

■連携実績（授業連携＝①の実施数、ラボ利用指示＝③の数）

- 授業連携：春学期16授業（前年15）、秋学期10授業（前年7）
- ラボ利用指示：60件（前年48件）

55 KANSAI UNIVERSITY

2015年度：広報活動上の工夫 -前年度をほぼ踏襲

■教職員のライティングラボ認知と活用促進のため

- 「レポートの書き方ガイド」（基礎篇・入門篇・発展篇）の配布
- ライティングラボ利用案内文書の配布

■学生のライティングラボ認知と活用促進のため

- ライティングラボHPの更新（http://www.kansai-u.ac.jp/ctl/labo/）
- ライティングをテーマとした講演会の開催（年1回）
- 「ライティングラボ利用案内」リーフレット（2015年度版）を配布
- ライティングラボのポスターを作成し、広く学内で掲示
- 「考動力」作文コンテストの開催（高校生：740編、大学生125編）

56 KANSAI UNIVERSITY

2015年度：ライティング講座の展開①

■千里山キャンパスでニーズが高いテーマをコンパクトにして提供

- 主に1・2年生が、レポートを書くためのワンポイントを学ぶ
- 1回30分（昼休み：12:20～12:50）

春学期：全5回シリーズ→レポートの書き方・手順を学ぶ
例）第2回：レポートの基本形とは？
第5回：コピペの何がいけないの？

- 開講数と受講者数：春学期：全5回120名（前年9回：180名）

57 KANSAI UNIVERSITY

2015年度：ライティング講座の展開②

■他キャンパスでも、同一の形式（30分×全2回）で実施
→特にニーズが高い「ポートの基本形」、「引用のルール」をテーマに

	高槻	ミューズ	堺
実施時期	5月下旬～6月中旬 12月上旬	7月上旬 12月中旬	7月上旬 12月中旬
時間と回数	30分×全5回 30分×全2回	30分×全2回 30分×全2回	30分×全2回 30分×全2回
受講者のべ人数	97人	37名	300名

→堺では、授業との連携がいき過ぎて、教室がパンク状態に

KANSAI UNIVERSITY

2015年度：月別ラボ利用者数（数値はのべ人数）

■開室日数→千里山キャンパス：136日　高槻キャンパス：128日

春学期	4月	5月	6月	7月	計
2014年度	38	115	152	257	562
2015年度	36	213	262	304	815
前年比	−2	98	110	47	253

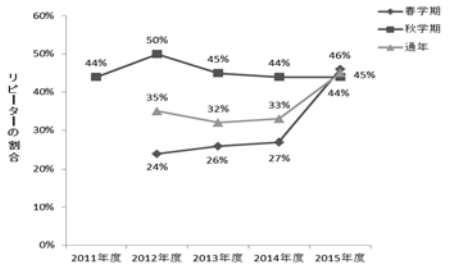
秋学期	9・10月	11月	12月	1月	計
2014年度	59	76	91	67	293
2015年度	107	127	124	169	527
前年比	48	51	33	102	234

- 前年度（855人）→2015年度（1342人）と487人増（1.57倍）に

59 KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

継続的な利用者（リピーター率）の変遷



KANSAI UNIVERSITY

今後の課題：2016年度に向けて

（1）ラボの利用者数（学内での認知度）をいかに向上させるか

- 各学期開始時（春学期4月、秋学期10月）を強化ポイントに
- 学部単位の協力体制の構築、拡充
  →各学部の教授会や執行部への働きかけ、広報活動

（2）学修支援としての質の保証をいかに担保するか

- 「ライティングセンター・ルーブリック」の導入
- 取り組み成果の発信（チューターを含め学外発表・出版など）

61

KANSAI UNIVERSITY

考察：まとめに代えて

（1）ラボの利用者数（学内での認知度）をいかに向上させるか
（2）学修支援としての質の保証をいかに担保するか

■上記2つのミッションにかんして、何がポイントなのか？

- 学内広報：特に、授業担当教員の認知向上と協力体制
- 連携体制：教員、関連他部署（キャリアセンター、図書館など）
- 学生対象イベントの開催：ラボ利用のきっかけの一つとして
- システム化：属人的ではなく、組織的に

⇒結局は、人と人のつながり、明るく・楽しい雰囲気づくり

62

KANSAI UNIVERSITY

謝辞

- 運営、ツール開発等でご協力くださる学部専任教員
- ライティングラボ特任教員、事務職員
- ライティングラボチューター（TA）

皆さまに感謝！

KANSAI UNIVERSITY

取り組み成果の発信について

■年度報告書

- 本日発表しきれなかった取り組みの詳細、データ
- 2013年度、2014年度、2015年度（校正中）

⇒後日、お送りしますので、小林まで問い合わせを

■ライティングラボHPにて、今後発信していく予定

KANSAI UNIVERSITY

ご清聴いただき、ありがとうございました。

65

KANSAI UNIVERSITY

第10分科会

質疑応答

Q1.（新人）チューターの研修について

Q1. ライティングラボ特任教員がプログラムを作成し、ファシリテータも担当しています。チューターの初期スキルにもよりますが、平均約1か月強（1人20時間前後）の事前研修を経て、特任教員3名全員が合格の判定をした後、支援現場に入ってもらうようにしています。新人研修の最終的な合否の境目となるのは、「セッション全体の構成力」「学生の抱えている問題点を引き出す力」である場合がもっとも多いです。

Q2. 正課授業科目（日本語表現系）との関係のあり方について

Q2. 関大には日本語表現関連の正課授業として、「文章力をみがく」や「スタディスキルゼミ（レポートを書く）」などの共通教養科目や、学部ごとで設置されている科目（例：文学部「知のナヴィゲーター」など）があります。シラバス検索や教務課担当の部署から情報を得て、連携体制の構築をはかってきました。今年度（取り組み4年目）からは、学部執行部や教授会などに赴き、直接、授業担当の教員にライティングラボの趣旨や、授業連携の具体的事例を説明させていただく機会を得る学部が増えています。

Q3. 個人情報の取り扱いについて

Q3. 学生の個人情報にかんしては厳重に管理しています。学生には、セッション直前に記入してもらう申込用紙において、個人情報や持参した文章を「研修および研究に（匿名で）利用してよいかどうか」を尋ねています。承諾してくれた学生の情報（申込用紙および持参した資料）のみ紙面でファイリングし、鍵付きのロッカーに保管しているため、関係者以外の取り扱いや、部外への持ち出しができないようになっています。

Q4. 相談に訪れる学生が抱える問題点について

Q4. 学年や時期によって様子は少し異なります。全学展開以降、前期（4月～7月の時期）に最も多いのは、「レポートの基本的な書き方がわからない」という学生です。レポート課題は出されたけれど「課題の意図が分からず、何をすればいいのか分からない」という学生もいます。チューターが支援に苦慮する例としては、「セッション中のリアクションが薄い（問いかけに反応しない）学生」や「提出期限間際にきて、答えを求める学生」などが挙げられます。

Q5.「長い文章の場合」の対応について

A5. 予約システムでファイルが添付してあり、事前に相談したい文章が手元にある場合は、チューターにはなるべく事前に目を通してからセッションに臨むようにしてもらっています。そのうえで、1セッションが40分と時間に限りがあるため、学生と相談のうえ、優先順位を決めてポイントを絞ってから、支援をするようにしてもらっています。

Q6. セッション後のアフターフォローメールについて

A6. セッション後、チューターと学生間で「1往復のみ」やり取りできる仕様にしています。メールで何度もやりとりができると、オンラインセッションとなってしまう可能性があり、対面での支援を重視している運営方針にそぐわなくなるためです。チューターから、その日対面で行ったセッションの趣旨を伝えることで、学生に振り返りを促すことが主な狙いです。学生からは、セッションで相談した文章がその後どうなったのかを添付ファイルで事後報告できる仕様になっています。